

藤井達吉コレクションに残された歌と言葉

—愛知県美術館友の会 所蔵品管理サポート部会の挑戦—

愛知県美術館 長屋菜津子

はじめに

愛知県美術館が所蔵する藤井達吉に関連する資料（以下、「藤井作品・資料」と略す）には、当然のことながら藤井達吉（以下、達吉と略す）自身が制作した作品が最も多い。そして当館の藤井作品・資料の特徴としては、達吉による墨書が多いことが挙げられる。例えば達吉の直筆の自叙伝と言える《矢作堤》は当館の所蔵であり、FT244《長母寺古材書棚と「草履作りの翁」ほか》のように、書棚の中にぎっしりと草稿と思しきものが収納された状態になっているものもある。また書と一体となった絵画や工芸も多い。

「藤井達吉の継色紙」と今日言われるものは、達吉が平安時代の「継色紙」と言われる装飾紙にヒントを得て、平安時代の技法とは異なる手法で制作された装飾紙であるが、紙の装飾と書が一体となって美を形成している本質の部分は同じであり、すべてに達吉の歌が書されている。

その他にも、FT97《絵巻「古郷の歌」》、FT115《絵巻「わがありしかたみ」》といった達吉の歌や随筆に絵をあしらった絵巻、画帳の類、あるいは茶碗などにも歌を書き込んだものなど、様々な様式を見出すことができる。

達吉は工芸家であるのか画家であるのか、これまで興味深い様々な議論がされてきているが、結局のところ芸術家あるいは総合芸術家という言われ方をすることが多い。それは工芸家や画家といった範疇には収まりきれない様々な活動があるからである。しかし達吉を研究する上では、後進を指導する教育者の側面や、故郷の行く末を案じ、工芸を産業復興に結び付けようとした社会的な活動家であった側面についても、合わせて研究される必要があるだろう。そしてこれら多岐にわたる活動の根底には達吉独自の哲学と価値観がある。

2013（平成25）年、宇都宮美術館・岡崎市美術博物館・渋谷区松濤美術館・碧南市藤井達吉現代美術館の研究の成果として、「藤井達吉の全貌」展が開催され、その図録の付録には当館所蔵の《矢作堤》の現代語訳が掲載され、大きな波紋を投げかけた。これは当館所蔵であっても、当館はまったく関与しておらず、碧南市藤井達吉現代美術館木本文平氏と土生和彦氏（以下、土生氏）の地道な研究の成果である。

一方当館は、動機はまったく別のところにあるのだが、その後、当館が所蔵する藤井作品・資料の悉皆調査をあらためて開始した。そしてそこで改めて当館が所蔵している作品・資料に達吉の「残された言葉」がいかに多いかを実感したのである。また作品を整理する上で、達吉の変体仮名を読み下さなければ、作品の名称が確定しないという現実的な問題にも行き当たったのである。

例えば「愛知県美術館所蔵の藤井達吉コレクションについて」の「現美術館移管後の調査と整理」の項で述べられているFT1403《継色紙落葉》やFT1404《継色紙他》の整理である。これらは元々桐箱に納められた多数の作品を、FT1403《継色紙落葉》の場合は、97点を一組1件として、FT1404《継色紙他》の場合は、117点を一組1件として登録されていた。しかし現在はそれらの多くは軸装がされ、個々に独立して展示も貸し出しも可能であり、それぞれの作品名が必要になった。

他の既に単独で登録されているものや、過去の愛知県総合芸術研究会主催の展覧会の目録を見ると、継色紙など歌が墨書されているものは、ほぼ書き込まれた歌の上の句5文字、もしくは5,7文字が、その作品の名称とされていることがわかる。よって《継色紙落葉》や《継色紙他》の場合も、墨書された歌を解読し、同じ法則でもって名称とすれば良いと判断した。しかし達吉の墨書は、ほとんど変体仮名で書かれている。しかも通常の変体仮名とは異なる達吉独特の変体仮名であるということをも前述、碧南市藤井達吉現代美術館の土生氏に御教授頂いた。つまり名称確定には、まったく異なる、それもかなりの分量の作業が必要になるということがわかってきたのである。

愛知県美術館は、この作業について、あるボランティア活動に援助を依頼した。

1 愛知県美術館友の会 所蔵品管理サポート部会

この部会の活動自体は既に10年の実績がある。既に愛知県美術館が行っているIPMプログラムの活動やその他所蔵品の管理保管のための活動など、いくつかの報告文を公開しているが、やはり本題に入る前にこの会の概略を説明する。

「愛知県美術館友の会」という任意団体は、当館の開館の翌年に発足しており、活動目的の一つに美術館への支援という項目を掲げている。この「支援」の方法は、友の会と美術館との協議によって、模索を続けながら発展をしてくれているが、具体的な作業面でのボランティア活動について、友の会側からの申し出は初期の段階からあったと聞いている。しかし美術館側の受け入れの協議が具体的に行われたのは、2004（平成16）年の学芸会議であり、この時は既に受け入れるという美術館の判断はあった上で、どのような仕事でお願いをするのか、という議題で学芸会議が開かれたと記憶している。現在のサポート部会には「友の会のための友の会によるサポート部会」と「美術館のためのサポート部会」と、大きく分けて二つのタイプがある

が、いくつかある部会の内、2つが「美術館のためのサポート部会」として活躍している。

発足当時のこの所蔵品管理サポート部会（以下、「部会」と略す）の仕事は、美術館の日頃の展示に必要な小物や、収納時の彫刻用カバーなどの製作、調査や保存処置に必要な「重し」の製作などで、保存担当の手の回らない部分を補助する活動が主体であった。しかし一方で愛知県美術館においては2002（平成14）年から木村定三コレクションの受贈、2004（平成16）年の後述する故杉本健吉作品の遺贈といった大量の一括受贈が続き、そのことで所蔵品を管理すべき美術課全体の業務量が膨れ上がった。その為、本来、保存環境の補助を目的とする部会であったが、木村コレクション・杉本健吉遺贈作品の調書やフォルダーの名前書き、調査過程に必要な付箋への名前書きなど、徐々に美術館側が依頼する内容が増え、活動の幅が増えてゆくことになった。しかし幸いなことに、活動の形態が固まり、作業内容がこのように増えていくにつれ、今度は友の会の会員の中で、この部会の活動への勧誘が広がり、美術課全体からあふれ出た仕事を支援する体制が整っていった。なし崩しのとも言える上記の経緯を振り返れば、この部会の成功は、美術館が計画的に組織を作っていった成果であるとは言えず、それよりも集まって下さった方々の美術館への理解と愛着によるところが大きい。しかもその理解や愛着が培われたのは、このサポート部会を内包する友の会全体の活動が基盤にあってこそのものであると言える。

2 前例となる杉本健吉の《新平家物語 挿絵》整理

2004（平成16）年、愛知県美術館は故杉本健吉氏のご遺族より、遺作の一部の寄贈を受けた。受贈件数は196件、その内4件（792点）が吉川英治著『新・平家物語』関係の画稿であったのだが、これの整理、基礎調査にもこのサポート部会が大きな役割を果たした。このサポート部会が、まったくの単純作業ではなく、美術館学芸員の調査研究の基礎的な部分に対して援助を行った最初の例である。

受贈は、挿絵画稿総数792点のうち、「朝日新聞社」の社票のついた画稿が多く含まれていた一塊を《新平家物語挿絵》（JD200400119000）、《新装本》と書き込まれた画稿が多く含まれていた一塊を《新平家物語新装本用挿絵》（JM200400003000）とし、その他を、それぞれ《反古》と《挿絵類》として受贈した。なお、この分類は受贈した時点で、一つの箱に入っていたり、一つの袋に入っていたりというようなグループ分けを、そのまま受けたものであり、「現秩序尊重の原則」に従い、受け取った時の重なるの順番に枝番号が付けられた。

2005（平成17）年より整理を始めたが、整理が進むにつれ、その内容が必ずしも上記のような分類になっているわけではなく、その重なりも特に法則性があるもので

はなかったということが明らかになってきた。また杉本健吉が生涯に渡って描いた『新・平家物語』関係の画稿は膨大な数にのぼり、当初より愛知県美術館が受贈したものはその一部でしかないことはわかっていた。

しかし実際に出版された印刷物は、今も入手可能なものが多く、それと照らし合わせてゆけば、どこの原画であるのか、また何のための草稿であるのかはわかる。

当館がとった整理のおおまかな手順は、まず作品の余白に、杉本自身あるいは編集者らによる文字情報が書き込まれた画稿もあり、特に原画の場合は、編集者か印刷会社かの手による指示書が残っており、それを頼りに出版物や箇所を探すことから始まり、その作業自体は比較的容易であった。

しかしその作業を終えてもなお、400枚以上の画稿が残された。後は1枚1枚発表されたものと突合せをしてゆくしかない。3年をかけた長い行程であり、カルタ取りの手法とは言え、突き合わせの対象である発表された挿絵の方はさらに多いのだから、まるでトランプゲーム「神経衰弱」の態である。当然、館内の職員だけではやりきれず、結果、サポート部会に協力を依頼することとなった。

当初は単なる突合せ作業としてお願いをしたのだが、途中で学芸員も意外に思う事が生じてきた。それは絵の傾向や朱印の形状などから、ただ全体のカルタ取りではなく、徐々に目星をつけて発表画稿を探す方が増えていったことである。考えてみれば当たり前のことであるが、やはり日頃から美術に親しみ、友の会活動を通じて研鑽を積んでおられる方々の観察眼は鋭いと感じた。

これらの作業を通じて、ほとんどすべての画稿が発表画稿と結びつき、そのおかげで愛知県美術館は個々の名称を確定することができた。おそらくこの部会の協力が無ければ、この一連の事業も完成しなかっただろう。これらの名称確定への考察と作業は、『愛知県美術館2008（平成20）年度研究紀要』において詳細を報告している。

3 「残された言葉」への挑戦

《継色紙落葉》と《継色紙他》の名称確定に、どのような作業がどれほど必要になるのか、その全容がほんやり想定できるようになった頃、「この作業は学芸員だけではやりきれない。友の会の有志の方々に協力を依頼した方が良い」と最初に言い出したのは、当時の館長 村田真宏である。村田は上記、杉本健吉の挿絵整理におけるサポート部会の目覚ましい活躍について、最も評価した学芸員の一人でもあった。

2014（平成26）年年末の館内会議での了





承を得て、2015（平成27）年1月7日付で美術館から友の会宛に依頼文が出された。その時はとりあえず《継色紙落葉》と《継色紙他》の名称確定を目標としており、期間を限定して、2016（平成28）年3月15日まで、つまり約1年間の作業援助をお願いしたのである。作業は月2回、その依頼に対して、友の会理事会での協議を経て、友の会および部会から快諾を得ることができた。

当時、当館には達吉の変体仮名について指導どころか読むことができる学芸員は在籍していなかった。そこで碧南市藤井達吉現代美術館に協力を要請し、2015（平成27）年3月18日、土生氏を招いて第1回目の勉強会を開催した。「藤井達吉の変体仮名は通常の変体仮名とは異なる」という土生氏の情報を元に、友の会の方々への広報にはその事を強調し、初心者の方を歓迎する趣旨を連ねた。実際に、それまでまったく変体仮名に触れた事のない方が大半を占め、当初から20名近くの有志の方が集まって下さった。

土生氏の講義は非常に丁寧で、変体仮名に初めてふれる方達も、その概要はよく理解されたようである。しかし変体仮名は1回の講義で、すぐに読めるようになるものではない。さらに継色紙の場合、金銀泥や金銀箔が多用されているため、反射が激しく墨色が飛ぶもの、作品自体に剥落があり墨線が途切れるものなど、そもそも解読が困難なものが多かった。

やはり独特の変体仮名とはいえ、それまで古文書を読む経験をされてきた方は、それなりに解読は早かったのだが、初心者の方々には、最初の3か月ほどは、かなり苦しい思いをされたようである。「おしゃべり主体で、楽しくなさせて下さいね」

とお声掛けさせて頂いたこともある。つらそうな表情を拝見すると、こちらも大変に心苦しかった。しかし当初から隣の席同士、教え合ったり話し合ったりされる姿が多かったのは救いである。

土生氏にはその後、9月16日にもう一度お越し頂き、これは講義の形ではなく、質問会の形式となったが、みなさんが、待ち焦がれていたように土生氏を囲まれたのが印象的である。

しかしその苦しい日々を乗り越え、日を追うごとに参加者の解読速度はどんどん早くなった。2015（平成27）年9月15日には、この活動の無期延長について、正式に美術館から友の会に依頼文が出された。当初の目標であった《継色紙落葉》と《継色紙他》の名称確定だけでなく、他の絵巻、草稿類の書き起しについても、引き続き、お願いすることとなったためである。

おわりに

この部会のおかげで愛知県美術館は、2015（平成27）年度末にはとりあえずFT1403《継色紙落葉》全97点の名称を確定することができた。その根拠となる歌の解読について、この研究紀要22号（2015年度）において、「FT1403《継色紙落葉》の解読」として公開する。これらはここまでに述べた友の会サポート部会有志の1年間の成果である。多くの方々が1年前には初心者であったという事実にも注目して頂きたい。

冒頭でも述べたが、愛知県美術館は所蔵する藤井達吉の作品・資料には、多くの藤井による「残された言葉」が書かれている。今後、友の会サポート部会の協力を得て公開してゆきたいと考えているが、順次となることに館外の研究者には御理解を頂きたい。

また他館でボランティア活動導入を検討されている所にあっては、一つの事例として検証材料として頂けるなら幸いである。

最後にこの読み下し作業はもちろん、愛知県美術館の活動に様々な側面から援助をして下さっている所蔵品管理サポート部会のすべてのみなさんに、この場を借りて心から感謝致します。

またこの所蔵品管理サポート部会の原動力となっているのは、愛知県美術館への理解と愛情だと感じる。また、その理解と愛情を生み出しているのは、まぎれもなく友の会の活動そのものであるとも感じられる。よって愛知県美術館友の会の活動を支えて下さっている皆様にも、心から感謝し御礼を申し上げます。